聖書における依存と自立の関係

中　川　昌　治

I
成人（依存から自立へ）

依存と自立の関係をとりあげるに際し、まず今年大変話題になった「成人式」の問題、つまり「成人」あるいは「大人になること」と「依存—自立」との関係にふれておくことにする。かつて、京都大学学生懇話室カウンセラーとして27年間にわたって学生と向きあって相談にのってこられた石井完一郎氏は、その著「自立のすすめ」[1]の中で、次のように書いている。「A・V・ヘネップのいう『通過儀礼』としての『成人式』（イニシエーション）を経て大人となる『死と再生』の節目を命がけでとおった」[2]、戦中派の自分と、当時の学生（1970～1980年代）とくらべて、「生きかたが唯ひとつしかなく、軍服軍靴の向こう側が『死の谷間』、背広をきられる保障がどこにもなかった私たちの灰色の青春よりも、はるかに恵まれているとはいえ、今や若者たちが真の『生きがい』を見いだして自立していくには未だかつてないほど困難な時代に生きているといわざるをえません」[3]と。さらに、「若者たちはどのようにして自立するか」[4]という章の中で、五つのパターンをあげている。（1）「モデルづく」——「思春期以降、すでに自立している先輩や年長者を新しいモデルとして、身近に、あるいはテレビやマンガ・書物のヒーローにまで見いだして、同一化しようとする半意識なモデリングによってです。それは、これまでにない新しい行動原理をとりいれ、自然に親から分離、自立していくやり方です。」[5]　（2）「ツッぱる」——「一般にはひとりで『我意』をはってツッぱったり、同世代の仲間に同一化して集団の力を借りたりして、自然に分離、自立するパターンです。」[6]　（3）「モラとる」——「エリクソンがいうように「猶予期間（モラトリアム）をみずから設けて、グズ

グズと最低単位だけはとったり、時には留年・休学したりしながら、様ざまな労働や奉仕などの『役割実験』、『社会的遊び』であれやこれやと迷って『生きがい』を探索する一方、重要人物としての親をやきもきハラハラさせながらゆっくりと、でも、着実に自立していくパターンです。」[7]　（4）「シラける」――「心をシビれさせる対象をもとめながらえられず、一過性に幻滅して興味・感動を失う意味で『シラケ』るしかたです。……グッと手ごたえのない親・教師・大人たちからしだいにシラーと立ちさって、ひとり小世界をつくって自立していくパターンです。」[8]　（5）「変身する」――「最後には、単なる自我の補強をこえて、入信によって『回心』したり、……オートバイに人車一体化したり家を出たり、『行動派としてゲバ棒にヘルメットで覆面したりなど、いわば『変身』の試みで急激に脱巣、自立しようとするしかたです。」[9]

石井氏は以上のような自立のパターンを分類しながらも、非常に重視しているのは、「ケジメのない『青年期』」[10]（傍点筆者）という点である。同氏によると、第一回目の成人式は入学式で、第二回は卒業式だという[11]。しかしそれも「キャンパスでなんとなく大人になる『なんとなく世代』[12]が多」く、「実人生へなんとなく出て、なんとなく生きいくだけになります」[13]と警告している。

この点に関連しているように思われるのは、千葉大学教授の宮本みち子氏による「膨れすぎた『ポスト青年期』」[14]という論文（2001. 3月）である。これは印象論だけでなく、調査データに基づいたもので、その分析は興味深いものがある。10年間にわたる若い成人たちの調査分析の結果、同氏は「青年期と成人期の間のライフステージを、『ポスト青年期』という用語で表わ」[15]している。つまり学校教育制度の拡充、さらに高等教育の大衆化に伴って、子ども期、青年期、ポスト青年期そしてやっと成人期に達するのだという。この現象は日本だけではなく、むしろ欧米諸国の若者の状況に近づいているのだそうである。したがって同氏は、「自立支援は大人たちの義務」[16]だとする。「小此木啓吾氏が『モラトリアム人間の時代』を書いた時代には、若者の将来はまだみえていた。大人になるための道筋があったのだ。長いモラトリアムを終えて、敷かれたレール上を走る列車に乗ることができた。しか

し今、若者が生きているのは、高度経済成長期でもバブル期でもなく、長期不況と不確実性の時代。乗り込める列車がないのだ。われわれ大人は彼らに、『早く大人になれ』というべきなのか、それとも別の生き方を期待すべきなのだろうか。何が必要なのか」[17] と問うている。そして「この時代に立ち向かうための知識や情報を提供し、生活設計のたて方、スキルを与える教育・訓練が必要であろう。そして何よりも男性・女性に自立できる仕事を与え、一人前の社会的地位を確立するための支援策が必要だ。また、彼らの創意とやる気を萎えさせない柔軟で人間的な職場組織への改革が必要だ」[18] と提案し、また親に対しても「保護的子育てから自立促進型子育てへと、子育ての方法」[19] の転換を迫っている。

Ⅱ
自立するための依存

人間の一生は、一般的にいって、幼児・こども期の依存状態から、青年期・ポスト青年期の依存の中での自立への準備期間を経て、大人という自立の時期を迎え、老年期はまた違った意味での依存状態に移行する。もちろんこの推移は、人それぞれであり、また、先にみたように時代によっても違う。また精神的自立とか経済的自立などにみられるような質的・量的な意味での部分的自立もあれば、その反面の部分的依存もある。すなわちある部分では依存したまま他の部分では自立しているということもある。

広辞苑によると、「依存とは他のものをたよりとして、存在すること」とあり、「自立とは他の力によらず自分の力で身を立てること。ひとりだち」とある。いわば、依存と自立とは、対立概念ないし反対概念と考えられてきた。

ハンガリーの絵本作家、マレーク・ベロニカは、「ラチとらいおん」[20] という絵本を書いている。世界中で一番弱虫の、ラチという男の子がどのようにして自立し、強くなったかの話である。ラチは将来飛行士になりたいのだけれど、犬も、暗い部屋も、友達もこわくて、いつもひとりぼっちで絵本ばかりみている。その絵本の中のらいおんの絵が大好きで、「ぼくに、こんならいおんがいたら、なんにも、こわくないんだけどなあ」と強くなりたい願

いをつぶやく。

ところが、ある朝、目を覚ますと、ベッドの側に小さな赤いらいおんがいる。「こんなちっぽけならいおんじゃ、なんのやくにもたたないじゃないか」と大笑いするラチに、「よくみていたまえ」と、ラチを床に押し倒すほどに自分の強さを見せつける――とうとう、ラチは、毎朝、らいおんと一緒に強くなる体操をはじめることになった。散歩にでかけるときは、らいおんをポケットに入れていく。ある日、犬を怖がって泣いている女の子を見ると、逃げ出そうとするが、らいおんが一緒にいることを思い出し、女の子の手をひいて犬のそばを通り抜ける。

その後も、今まで怖がっていた暗い部屋や、のっぽのいじめっ子にも怖がらずに立ち向かい、らいおんに打ち勝つほどに強くなって、みんなの信頼をえる。

ラチはらいおんにお礼を言おうと思って、ポケットに手をつっこんでみると、らいおんはいなくて、りんごだけが入っている。いつの間にか、らいおんがいなくても、強くて勇気のある、自立した子どもになっていたのである。

家に走って帰ってもらいおんの姿はなく、手紙が一通残されていた。

「きみは、らいおんとおなじぐらいつよくなったね。もう、ぼくがいなくてもだいじょうぶだよ。……」

涙を流しながら手紙を読んでいるラチの姿がえがかれている。

この本について、吉村真理子氏は、つぎのように書いている。「子どもにとって自立することはうれしいには違いないが、それによって悲しみも体験する。今までいつもいっしょにいてくれ、何でもやってくれた母親が、少しずつ自分から離れていくような気がする。……

『先生、見てて』と手を引っ張りにきて太鼓橋につれて行き、側に立っていることを確かめてから一段一段登っていく子。……

保育者は常に子どもを助け、手伝い、見守り、教え、励まし、そして『一人でやってごらん。きっとできるよ』と言えるときを測っている。

子どもは、はじめのうちは未練がましくしぶしぶと離れていくが、やがて、子ども同士で夢中になって遊びはじめると、もう、お呼びがかからなくなってくる。……

ラチのように、子どもが自立するためには、世界一の弱虫でなくても、らいおんの助けが必要なのである。」[21]

しかし「成長の時期によっては、自立するために依存が必要である」[22]と書いていたのは、松田道雄氏である。知的障害の子どもの施設でのこと、子どもに「社会性」をもたせるため、つまり子どもが成長して園からでていくとき、世間のだれともまんべんなくつきあえるようにするために、子どもをなるべく早く集団の中に入れ、他人になれさせておかねばならないという意見が出た。それに対して、この子どもたちは、まだ大ぜいの人とはつきあえないので、ひとりの人とでもいいから、人間として深くむすびつくようになることの方が大事だという反論がでた。同氏はこの反論に賛成していう。乳児院と保育所とを併設しているところを見学した人の話を聞いて一つの仮説をたてた。すなわち、「終日施設にいる子供のほうが昼間だけくる子にくらべて、どこかおどおどしたところがあるという。ブランコのあるところにつれていっても、外からきている子のほうが、乱暴にこいであそぶ。終日いる子は用心してのる。

小さいながらも独立している終日組の子は、自分の行動に自分が責任をおわねばならぬので慎重なのだろう。かよっている組の子は、親に依存しているために、かえって大胆にふるまえるのだろう。

人間はおさない時代には、少数の人にふかくつながることによって、人間としての安定感をもてるのではないか」[23]と。そして同氏は結論として、「人間というものはおかしなものだ。成長の時期によっては、自立するために依存が必要であるとは」[24]と驚きの言葉を発している。

しかし、それは成長の時期、つまり幼児期においてだけではなく、生涯にわたって、自立するためには依存が必要であるといえる。先述のように、普通、自立と依存は反対概念であって、自立とは依存がなくなることであり、自分に頼ることであると考えられている。しかし、そうではなく、人間とは、生涯何かに依存しなくては生きてゆけない存在なのである。ただ、成長に応じて、何に依存するかということこそが問題なのである。

Ⅲ
必要な依存性

作家の大庭みな子氏は、女性学の問題との関連で、「人は男であろうと女であろうと自立はできない。人は人と人との間に生きるものである。助け合い、頼りあって生きるというのが人間というものであろう」[25] と記して、人間は自立できないという。

また、社会心理学者の星野命氏は、「従来考えられていた依存性というものは、自立性と反対の概念であって、自立するためには、依存性というものが減っていってなくなる必要があると考えられていたんですけれども、実はそうでなくて、依存性というのは人間にはもともと必要なものだ、だから、いかに自立している人間といえども、決して他人の力を必要としないということではない。自分がある困難にぶつかったときに、その困難を解決する方法を自分自身の記憶の中で、あるいは自分がかつて示されたモデルとなるような行動を思い起すことによって満たしていくことができれば、それは外から見ると自立になる。そして発達的に見ますと、最初は母親なら母親、あるいは父親、両親と子どもの間でそういう依存欲求の充足というのが行なわれるわけですけれども、成長に伴っていわゆる依存の対象が広がってくるわけです」[26] と語って、母親、家族、学校の先生、友達などを挙げている。

さらに同氏は「いちばん自立した状態というのは、自分のまわりにいる現実の人には実際に頼らなくても、目に見えない、しかし自分の心の中に存在する人格的存在に対して、たえず自分が問いかけ、答えをもらって、自分の行動を判断していくことができれば、これが依存のいちばん最高の形式であり、かつ客観的に見まして自立しているということになる。結局理想的な状態での宗教的人格ですね。神というものをほんとうに信じている人の場合には、まあ神様に甘えていると言えないことはないわけです。しかし、人間レベルで見ますと、頼るものは神だけであるから、非常に自立しているようにみえる。」[27]

このことから「立体聖書研究」では、「依存の姿勢はかならずしも自立的であることと矛盾しない。かえって、依存の相手を、幼い時は親だったものをだんだん広げていって神にまで向けるにいたったとき、しっかりした自立

性も生まれてくる、というのである。常識的には、自分に頼ることが自立というふうに考えられているが、あるいはそれは、自立の発達からみれば退行現象なのかもわからない。依存の対象が自分しかないということは、萎縮し閉鎖した小児的姿かもわからないのである」[28] と説く。

Ⅳ
神への依存こそ真の自立

人間は、他者（親など）の意志、聖書的には神の意志（意味・目的・使命など）によって、この世へと、全くの依存状態の中で生み出される（神による創造）。子ども時代、長い青年時代を経ていわゆる自立した状態の大人となるも、本人は知らずとも、人間は神への依存状態、神が共にいます状態でありつづける。そして老境期に入って、またこの世界の人や物への依存を深めつつ、死を迎え、復活にあずかり、永遠の眠りにつき、全き神への依存の状態つまり神のふところに包まれる。

今、老境期には人や物への依存が深まると書いたが、それは「朝食のテーブルには、理想主義者としてつき、昼食のテーブルには現実主義者として座し、そして夕食のテーブルには唯物主義者として向かう」という西欧のことわざにあるように、人は老年になると、すべての点において、物質的になり、懐疑的となり、人の注意をひくためにものに頼るという意味で、いわば「老醜」のことである。この「老醜」に相当する精神的肉体的衰えについては、聖書は余り語らない。コヘレトの言葉12：３～６に記されている程度である。渡辺善太氏[29] は、聖書が「老醜」についてひどく記さないのには、二つの主な理由があるという。「一は人間が醜悪なるは、必ずしも老境にはいってからのみではなく、その生まれるより死ぬまでの全生涯にわたって醜悪なりとしているためであろう。」それはノアの洪水前も後も変わっていない。「第二の理由は、信仰に生きる人間にあっては、『老醜』というべき現象が、あまりみられない—否、かえって信仰における『老熟』がみられるものとしたからであろう」と。

実はコヘレトの言葉12：３～６は、「老醜」について書くのが目的ではなくて、前述の第二の理由を目的としているのである。すなわち「苦しみの日々

（悪しき日―口語訳）が来ないうちに。『年を重ねることに喜びはない』と言う年齢にならないうちに。太陽が闇に変わらないうちに。……」（12：1b～2）、「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ」ということを強く勧告したいためである。自立をめざして、準備している時、しかも一番創造主を必要としないように思われるときにこそ、創造主に心を留め、長い長い青年期を充実させ、しかも老境期に備えよというのである。

そして、幼児性を捨てることである。パウロは、「幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた」（コリント、一、13：11、傍点筆者）。と語る。さらに「兄弟たち、物の判断については子供となってはいけません。……物の判断については大人になってください」（コリント、一、14：20）と勧める。ただし、イエスが語るように大人になってしまうと失いがちな「自分を低く」（マタイ18：4）することはすてずに、いな改めて身につけ、幼子となるときはあっても、せいぜい「悪事」（コリント、一、14：20）ぐらいにしてほしいという。

さらにエフェソの信徒への手紙の著者は、「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」（5：21）に始まる記事の中で、創世記2：24の「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」を引用し、「それゆえ、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」（エフェソ5：31）と記している。この聖句は、大人への成長は、「父と母を離れる」ことであるとする[30]。

「離れる」は「別れる」意味にもとれる。そこで「離別」と「別離」を区別し、その心理学的な相違を島崎敏樹氏の分析を援用して解釈してみることにする。「それは親しい人が遠方へ旅立ってゆくときの別れの場面の心理的光景である。……この別れの場面は……私が歩いてゆくホームの出口が列車の進行方向と同じか反対かによって、別れの実感がちがってくるのである。列車の出ていったあと、うしろへふり返って逆の向きに出口の方へ歩いている場合では、私と友との間はひきはなされてしまったという他動的なやり切れない感じがする。もう一方、列車の去ってゆくそのあとを同じ向きに歩きながら出口に向う場合ならば、自分は彼を送ってやったのだというしみじみ

した実感がわくにちがいない。前の場合は「離別」であり、あとの方は「別離」である。」[31]（「　」は筆者）。この意味にとると、「父母を離れ」の場合は、「別離」であって「離別」ではない。「離別」だとうば捨てに近い。しかし「別離」の場合、父母と子が同一方向に向かって別れるということになる。その方向とは、創造主なる神の方に向かって別れることである。言い換えれば、親も子も、神に向かって、子が親の上に、親が子の上に、神の平安と祝福を祈りつつ別れることである。そして二人（男と女）は一体となって結ばれる。

この関係は、ショラム・アレイハム原作を映画化（ミュージカル）した、「屋根の上のバイオリン弾き」[32]の中の父と子（娘）の関係を思い出させる。ロシアのユダヤ人部落に住む、牛乳屋テビエの一家の物語である。テビエは喜びであれ、悲しみであれ、何んでも祈りになる。すべてそのまま神にぶっつける。五人の娘のうち三人に結婚の話がもちあがる。ユダヤの伝統では、娘の縁談は父親が決めることになっていた。しかるに三人とも親の決めた相手ではなく、長女は仕立屋の職人と、次女は革命家の青年と、三女はこともあろうにロシアの青年（異教徒）と結婚したいという。父は最初は反対していたが、神に祈って、最後は許す。そして「娘にお恵みを、娘に暖かさを与え給え」、「彼らの上に神の恵みを与え給え」と祈る。ここには伝統に生きてきた父の孤独と頑迷がある。しかし隠しきれない愛と祈りがある。娘たちも父の立場をよく知りつつも、自分たちの決めた道を歩み出すとともに、父への信頼と尊敬と祈りをもっている。

つぎに使徒言行録に出てくる「足の不自由な男」（3：1～10）の物語をみてみよう。ユダヤ教の夕べの祈り（午後3時）のとき、ペトロとヨハネは神殿に行った。すると生まれながら足の不自由な男が神殿の境内の「美しい門」（金銀銅で装飾された）のそばに運ばれてきた。生まれながら自分の足で歩めず、人生をみかぎり、毎日「美しい門」のそばでうずくまって、施しをこうていたのである。他人をあてにして、施しをうけることばかり考えていたのである。彼はいつもと同じようにペトロとヨハネを見て、施しをこうた。「ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て」（3：4）、足の不自由さの故に、他人に依存していくしか生きていけない、男のゆがみを見抜いた。二

人が「わたしたちを見なさい」（3：4）と言うと、「その男は、何かもらえると思って二人を見つめていると、ペトロは言った。『わたしには金や銀はない』」（3：5～6）と。つまり「金銀はない」とこの男と同じ立場に立ちつつ（金銀に依存するのではなく）、自立した自由な人間として生きる自分たちの生の根拠を示す。「（わたし）が持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と。「そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍りあがって立ち、歩き出した。そして歩き回ったり躍ったりして神を讃（新共同訳は賛であるが筆者は讃とした）美した」（3：7～8）のである。

ここにイエス・キリストひいては神のみに依存することによって、自立することのできた新しい人間が誕生したのである。この男は「40歳を過ぎていた」（4：22）ようだから、たとえ幼児における教育が十分（自立するための両親への依存が十分）でなかったとしても、イエス・キリストに根ざす（基づく、根拠とする）ことによって、やり直しのきく人生が開かれるのである。

イエス・キリストひいては神にのみ依存するが故に、自立した自由な人間として、歩む道が開かれるのである。

カトリック作家の曽野綾子氏は「私のおんぶおばけ」[33] と題して、「神というものは、教会や墓場がお祭りや儀式の時にだけあるものではなく、困ったことにそれはおんぶおばけのように私の体のすぐそばにいつももやっと存在している。日常生活の中では、このもやもやの存在を適当に忘れるために、時々ちょいちょいと手で払いのけながら、私なども何とか暮らしているのです。しかしこのおんぶおばけは、人間の終末が近づいたと思われる時になると、がぜん光り出して来る。危険が迫ったとき、たった一回の死を迎えるとき恐らくその光は目をつぶすほどの力となりそうな気がしています」と記している。私たち人間一人一人に、神は普段はそれとなく共にいまし、いざという時には、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」（マルコ6：50、マタイ14：27、ヨハネ6：20）[34] と自らの存在を示し、励まされるのだ。

最後に、詩人茨木のり子氏の「倚りかからず」[35] を記しておきたい。

「もはや
できあいの思想には倚りかかりたくない
もはや
できあいの宗教には倚りかかりたくない
もはや
できあいの学問には倚りかかりたくない
もはや
いかなる権威にも倚りかかりたくはない
ながく生きて
心底学んだのはそれぐらい
じぶんの耳目
じぶんの二本足のみで立っていて
なに不都合のことやある
倚りかかるとすれば
それは
椅子の背もたれだけ」

作者の意図に反するかもしれないが、私には、この「椅子の背もたれ」こそがイエス・キリスト、ひいては神に思えるのである。しかも、「椅子の背もたれだけ」（傍点は筆者）である。

注

1）石井完一郎著「自立のすすめ—学生相談27年から—」、1984、弘文堂。
2）前掲書　16頁。
3）前掲書　17頁。
4）前掲書　39-72頁。
5）前掲書　41頁。
6）前掲書　47頁。
7）前掲書　53頁。
8）前掲書　60頁。
9）前掲書　69頁。

10) 前掲書　31頁。
11) 前掲書　28-31頁。
12) 前掲書　31頁。
13) 前掲書　31頁。
14) 宮本みち子著、85-96頁。特集「いつ大人になるか」所収。「論座」2001年３月号、朝日新聞社。
15) 前掲書　87頁。
16) 前掲書　96頁。
17) 前掲書　96頁
18) 前掲書　96頁。
19) 前掲書　96頁。
20) マレーク・ベロニカ著、徳永康元訳「ラチとらいおん」、1965、福音館書店。
21) 吉村真理子著「絵本の匂い　保育の味」104-108頁、1998、小学館。
22) 松田道雄著「自立と依存」、毎日新聞、1974.3「ハーフ・タイム」欄。
23) 前掲書に同じ。
24) 前掲書に同じ。
25) 大庭みな子著「雪解けと和解の時代」。「現代日本文化論２」、河合隼雄・大庭みな子共同編集、「家族と性」所収、８頁、1997。
26) 「甘えについての聖書研究」103-104頁、福音手帖、1971.10月号所収、コンコーディア社。原本：星野命「『甘え社会の中の女の立場』原ひろ子との対談」、婦人公論1971年８月号、所収。
27) 前掲書　103-104頁。
28) 前掲書　103-104頁。
29) 渡辺善太著「老人は夢を見るだろう」590-591頁、渡辺善太全集５巻、1966、キリスト新聞社。
30) 「男」（創世記）と「人」（エフェソ）とは同じ意味にとり、その上で、「女」にも、同じ意味に解釈した。つまり「女は父と母を離れ、その夫と結ばれ、二人は一体となる」と。創世記とエフェソの信徒への手紙の引用聖句はもちろん、他の引用聖句も「新共同訳」、1988、日本聖書協会。
31) 島崎敏樹著「心で見る世界」7-8頁、1961、岩波新書。
32) 「Fiddler on the Roof」WARNER HOME VIDEO. Copyright© 1971。
33) 曽野綾子著「私のおんぶおばけ」、1974、毎日新聞「仮の宿」欄。
34) ヨハネ６：20には「安心しなさい」という言葉は入っていない。「わたしだ」とは、イエスが神の子であり、神の臨在（現在）の定型的表現である。
35) 茨木のり子著「倚りかからず」48-50頁、1999、筑摩書房。